Ann. Rep. Asahikawa Med. Coll.
Vol.19, 89-101 (1998)

転身と「他者」
― ホーフマンスタールの『影のない女』をめぐって ―

田　中　　剛

0．「生」(das Leben) という象徴的秩序と、「生の生」(Leben des Lebens) である創造的自然 ―― ひいてはその現象形態である「転身」―― とが永遠の神秘的な矛盾をはらんでいることを、ホーフマンスタールはリヒァルト・シュトラウスへ宛てて次のように述べている。

転身とは生の生であり、創造的自然の本来の神秘劇であります。他方、固着は硬化であり死であります。生を欲する者は、自らを越えてゆかねばなりませんし、また転身しなければなりません。つまり、忘却しなければならないのです。ところが、なんとこの固着や忘却への抵抗、誠意に人間的なあらゆる尊厳が結びついているのです。このことがまさしく根源的矛盾のひとつであり、現存在はその矛盾の上に建立されているのです。それはまるでデルポイの神殿が底無しの大地の亀裂を基盤としているが如くであります。[1)]

1．0　われわれの現存在 (das Dasein) が、この根源的矛盾、いわばこの表象不可能な擬似的な点に自己の存在の核を据えているという認識は、ホーフマンスタールが現代に復活するに十分な根拠を提供している。前世紀末葉のデカダンス、耽美主義的カテゴリーや詩人の生と死というような芸術観からこの作家をとらえる姿勢はすでに過去のものになりつつある。むしろ、この時代すでに彼は言語そのものの内奥に分け入って、極めて科学的な視点から、つまり言語にかかわる病理学的視点からそれまでの審美論や象徴論に鋭いメスを入れたことをわれわれは念頭におきつつ、そこに新たな現代的読みの可能性を探る必要性があると思われる。例えば、「チャンドス卿の手紙」においてチャンドスが顕微鏡で小指の皮膚の一片を見たときの経験を綴る箇所にもあるように、言語が「習慣の単一化する眼」ないし物を「一つの概念」でとらえる機能を失い、「すべてが部分に解体し、その部分がまた部分に分かれて」しまうこと、さらに個々の言葉が自己の周囲に浮遊し、渦を巻きつつ彼を凝視し、彼も否応なくその虚無にも通ずる渦

旭川医科大学医学部ドイツ語　　e-mail: t344@asahikawa-med.ac.jp

の底に見入らざるを得ないという自らの精神的危機を告白する場合、[2] ホーフマンスタールは何を問いかけているのだろうか。

1.1　ここから彼の様々な文学的試みが始まる。そして、その一つが本論文で中心テーマとなる「転身」である。ホーフマンスタールはシュトラウスへの同書簡のなかで、「エレクトラ」と「アリアドネ」の例を引いて、近づく死によってようやく転身の予感に包まれる前者と、愛によって転身を成就し現存在の硬直から自らを救済した後者を対比している。凝視する対象を石と化すほどの復讐心に燃えたエレクトラ、クリテムネストラのアガメムノンに対する過去の殺害とこの母が近い将来確実に負うべき業罰を、「現在」という時間の檻に閉じこめて自らやつれ果てていく彼女は「転身」を拒み続けた。他方、アリアドネはバッコスの腕のなかで「転身」する。そして、彼女が彼の運命となり、彼も彼女の運命を引受ける過程もこの「転身」によって実現される。彼女は彼を死神と誤認するが、ためらうことなく身を委ね、「転身の秘密」のなかに入り込み、そして再び彼の腕のなかで蘇るのである。[3]

2.0　『影のない女』はそのような秘密を解き明かす鍵を与える作品である。影のない妃、皇帝の御意に叶うべく影を求めて旅立つ精霊の妻という設定は、確かにある種の童話の世界への連想を呼び起こすが、この作品でホーフマンスタールが提示するテーマがいわゆる夢幻劇のそれとは無縁であることは上記のことから明らかであろう。ここには作家自身の極めて内面的な葛藤と救済のドラマが隠されていると言わねばならない。

2.1　まず、語りの筋をキーワードになる重要な事項を盛り込みながらたどることにする。

精霊の国から来た妖精の妃に、人間界という時空間において皇帝への愛を成就するためのある試練が課せられる。彼女は「転身」の秘法の助けを借りて乳母とともに俗界に下ってゆく。乳母の奸計でここに住むひとりの染め物屋の女房から彼女の影を奪おうというのである。しかし、他方皇帝は妻の「真の目的を知らぬまま」、その後もいつものようにまるで妻と出会った「場所」に何度も引き戻されるかのように狩りに出かけることをやめない。妃との出会った時、彼女を庇護しようとして図らずも打擲してしまった大切な「赤い鷹」を捜し出す目的もあったのである。

2.1.1　初めての出会いの時、彼女はある動物の体に潜り込んでいた。皇帝は（羚羊に転身した）この妖精の娘を捕える。彼女の視線は不思議にも彼の腕を萎えさせ、投じられた槍は逸れる。そして、彼女が羚羊の体からすばやく抜け出たとき、皇帝の恐ろしい狩人を思わせる表情は急に和らぎ、愛する者の優しい至福に包まれた。

紛失していた護符が(Talisman)「赤い鷹」によって再びもたらされ、彼女はそれが転身の力

を与えてくれていた精霊の父王からの贈り物であったことを知る。その白鈍色の平たい石には「焔のように輝き、眼差しのように瞬く文字」(die Schriftzeichen, die . . . glommen wie Feuer und zuckten wie Blicke) が書かれてあり、乳母（魔女）の制止にもかかわらず、妃によって素早く読み取られる。まるでそれを透して地獄を覗き込んでいるかのように、彼女は読むというより深い眠りのなかにある者の胸から絞りだされるような不気味な声を出す。それは罪を裁く呪咀の言葉であった。

コノ帯ヲ解ク人間ニ呪イト死アレ。コレヲ解ク手ハ大地ヨリ、影トトモニ
自ラノ運命ヲ買イ取ラザル限リ、石ト化スベシ。ソノ手ノ帰属スル身体ハ
石ト化シ、ソノ身体カラ輝ク眼モ石ト化スベシ。内ナル意識ハ生キ長ラエテ、
永劫ノ死ヲ命ノ舌ニテ味ワウベシ。期限ハ星辰ノ潮汐ニヨリテ定メラレテアリ。[4]

2．1．2　皇帝は彼女の心を捕らえすでに妃にしたことによって、彼女は彼を愛し続ける限りいずれの時にか護符のこの呪咀を蒙る運命となったのである。しかし、彼はそれに関し終始告知されぬまま事態は推移する。なぜこのようなことが起こり得るのであろうか。ここには、語られてはならない何か、皇帝の「心的現実」において象徴的宇宙に統合されることを拒む何かが存在する。もし、彼がこの「何か」を知ってしまえば、彼はこの剰余の知の代償を、呪咀の言う通り、意識はあるものの石と化した身体に閉じこめられた存在によって支払わねばならない。すでに彼は羚羊の衣を脱いだ妃に、「自分のような死すべき定めの人間はこのような強烈な至福にはもう二度と耐えられないであろう」と告げていた。[5] つまり、皇帝はこの「何か」に関する知が自らの無意識的真実に近づきすぎることを意味し、またその結果彼の存在が脅威に晒されることを直感している。

2．2　精霊の姫を娶った皇帝は無知のまま狩りを続ける。精霊の王にとってこの掠奪は護符に書かれてある呪咀の実行を意味する。しかし、一年の猶予が与えられる。これは皇帝への愛に燃える姫の強い意志があったればこそである。いずれにしても、呪咀は皇帝が意図せずしていわば「精霊の王殺し」ないし「原父殺し」という罪を背負ってしまったことを示唆している。この罪は精霊の妃のために影を手に入れること、未生のものたちに生をもたらすことで解消されるかもしれない。しかし、それはたとえ願ったとしても彼の力の及ばぬことである。

2．3　さて、猶予を与えた原父は人間に転身した姫が影を手に入れたか否か、未生のものを宿したか否かを確かめるために、人間界に使者を送り続ける。十二人の精霊の代理人たちの最後の一人が明かす呪咀は、「残りの三日のうちに妃に影が得られなければ皇帝は石と化す」というものである。使者の相手をした乳母は、この報せを妃に隠し、早く精霊界に戻ることを画策す

るが、「誰か」の委託によるかのように、「赤い鷹」があの護符を妃に届けたがためにその意図が知られてしまう。妃は乳母をせきたてて影を手に入れるよう命令する。「密かに」、彼女とその乳母とが俗界に下りてゆく。

3．0　染め物屋の女房が標的である。駱駝のような頑丈な背をもつ働き者の夫バラク、美貌だが意地悪そうな妻が妃の視野に入ってくる。貧相な女中に身をやつし、二人は人間界の雑踏に溶け込む。乳母は女房の虚栄心に媚び、またあるときは欲望を奮い立たせて、彼女の想像的同一化としての鏡像にひびを入れる。それを現実よりさらに一層美しく磨き上げるげるべく魔術を施すのである。女房は乳母が魔女であること、しかし傍らにいて動くこともできない妃が乳母の主張とは異なりその実の娘ではないこを即座に感じ取るにもかかわらず、逃れようもなく次第に術中にはまってゆく。

3．1　魔女は躊躇する妃に対して、「お姫さま、あなたの影のためなのでございます」と繰り返す。彼女が料理女の役を担えば、七尾の小魚を焼く平鍋から未生のものたちの悲鳴が鳴り響き、その焔のもとで髪飾りリボン（姫が皇帝への私信を封印したと同じ宝石を鏤めた貴重なリボン）を女房の髪に編み込み、魔法の鏡をそれにかざせば彼女の美貌は一段と浄められる。妃には小魚たちの「母」に呼びかける苦痛の歌声が聞こえてくる。[6] しかし、魔女は未生のものたちに向けるべき呪咀の文言を女房に吹き込もうとする。

呪ワレシ者ラヨ、ワレヨリ去レ
ワガ影ノモトニ住マエ[7]

3．2　女房の日常的現実が悪夢となる。子を授かるべく、まじないの儀式すらする正直で武骨な女房おもいの染め物屋との生活に、魔術が割って入る。出来事のなれ親しんだ継起は、いわば「無法な継起」へと変貌する。魔女は女房の覚醒と眠りのわずかな隙間に侵入したのである。女房の脳裏には、魔女の彼女に対する「賛美の言葉」、己れの「影」を飛び越えて（未生のものたちを暗い胎内に閉じこめたままにして）永遠に朽ちない美貌を手に入れることができるという「予言」、未知の愛人からの誘惑的な伝言が渦巻き、抗いようもなく好奇心と羞恥心とが錯綜する。[8]

4．0　妃は女房が魔女の手に接吻しようとしている光景を見る。魔女は、これが契約の一部であり、実現すれば女房の身体からその曇った影が離れてゆき、生むことを望んでいない未生のものたちからも開放されて「透き通るばかり輝いた身体」になると保証し、女房は魔女のこの「全知」のいかがわしさをときどき痛罵しながらも、未知の愛人の存在の示唆によって燃え立た

された虚栄心はくすぶり続ける。

4．1　女房が美貌という己れの属性を「他者」の欲望と同一視するこの段階で、彼女は彼女のなかにあって彼女以上のもの、それによって彼女の行動のすべてが色づけされ変質させられるような「ある対象」を見いだす。「なぜこの男と暮らし、虚空を凝視する生活を送らねばならないのか」という問いの穴をこの対象が埋める。

4．2　彼女はこの対象によって自分を支えている自分以上に愛しているものの次元に入った。魔女が示唆した夫のバラクとは違うもっと理想的な、「品のいい、領主様のような風采の」男が、「憧れと満ち足りた心」の薫香を放つ彼女に接近しつつある。魔女はこのような巧みな誘導によって（「甘松香よりも甘い奥様の息」とすら賛嘆する）、女房の恍惚の火炎から何ものかが彼女の心に染み入り、「ひたひたと寄せてくる」幻覚を呼び起こすのである。

5．0　さて、妃の父、精霊の王（原父）は「生ける死者」として人間界に帰還することをやめない。もし、姫が影を宿すことにでもなれば、例の象徴的勘定の清算が永遠に葬り去られるからである。十二ヵ月にわたって監視が続けられる。しかし、象徴的法の審級として君臨するカイコバート王（Keikobad）が、なぜ姫の乳母として魔女を仕えさせているのかという疑問は、この「斑紋ある蛇」に例えられる老女が女房のもとに寄せる魔霊エフリート一人によって明らかとなる。

5．1　この魔霊は「生命界」の周辺で待ち伏せし、人間たちを騙して手玉に取るだけでなく、思いのままに好みのものの姿に変わる能力を兼ね備えた無法者である。魔女は彼の前にひれ伏す。女房の眼（魔女や妃の眼にも耐えられない人間界の眼）は、当然のことながらエフリートの視線が迫るのを拒めない。「他者」の視線であるからだ。女房は叫ぶ。

それだ、その眼だ、この人の眼を取りのぞいてくれと言っているんだよ！[9]

5．2　彼の美しいが豹のような、また蛇性を帯びた顔立ちを貫いているのは「抑えきれぬ貪婪さ」であり、女房は心の底の底まで彼に対して開き切ってしまう。この見るに耐えない光景に、妃の側から乳母に向けて女房を助けるよう求める叫びが繰り返される。しかし、乳母は「影」を手に入れるためにエフリートを操ることに固執する。彼女は、「思い焦がれたこの女は欲望の焔」のなかで焼かれなければならないとまで言う。

曲がった釘はそれだけではまだ鉤針にはなりませぬ。まず、逆鉤を取り付けねば。[10]

妃は女房のエフリートに対する恐怖を感じ取る。彼が女房を抱きあげ連れ去ろう飛翔の構えを見せたとき、妃は彼女を庇護すべく彼を阻止しようするが、女房はまるで彼のなかに融解してしまったかのようなのだ。魔霊は視線を妃にむける。彼女はその大きさの違う両眼の奥に、不気味にも薄ら笑いを返してくる「何ものに決して踏み込み得ない世界の深淵」を覗き込んでしまう。エフリートを見つめ続ける女房をかばおうとして、この瞬間、彼女と同様に妃の思考力も弛緩する。[11]　覚醒と眠りの狭間に屈強なバラクが戻ってくる。

5．2．1　愛の転移は妃にも及んだ。彼女が人間の感覚をわがものとし始めた証である。彼女のなかに芽生えて「彼女以上のもの、それによって彼女の行動のすべてが色づけされ変質させられるようなある対象」が見いだされたのである。「現実（界）の胸苦しい感情」との闘いが彼女のなかで進行していたのだ。彼女を襲った「なにか悟ったような弱気」、「散り散りになる思考力」から逃れようとしても、そこに精霊の王も象徴的法の審級もない。むしろ、享楽にたっぷり浸って浮遊しているシニフィアンの「一者」がいるのみである。

5．3　エフリートは精霊の王の拠って立つ基盤の裏面からやって来る。そこは本来不可能ゆえに禁じられた世界、享楽の意思の支配する世界である。そしてこの魔霊の背後には、「最高に邪悪な存在」がある。この存在は、染め物屋の女房のなかに潜伏していた欲望を切断してしまった。このことは妃のバラクに対する思いにも通ずる。いずれの場合にも、欲望の対象＝原因は純粋な見かけにすぎない。欲望はそれ自身の原因を遡及的に仮定するのであって、到達不能な剰余の空無にそのときどきの名前を与える。女房がエフリートに示した半ば拒絶的態度、バラクに対する変わらぬ信頼は、欲望が一つの対象から他の別の対象に滑り込むことを例証する。妃とて同様であり、彼女の皇帝への愛に何の変化も結果として生じない。他方、エフリートは原初的な空無の周りを回る欲動のポジティブな欠如を体現している。妃が彼の眼の奥を覗き込んで幻惑させられたのもこの欠如、禁じられた深淵であった。

6．0　皇帝は狩り旅を続け、七連峰の太陰の山並みに分け入り奥へと進む。彼は鷹匠に厳命を下す。

> 汝の恐怖はどんな研ぎ澄まされた眼光よりも鋭くものを見てとる。さあ、私が待ち望んでいる鷹のことを報せてくれ。すぐに告げてくれるか、さもなくば死を覚悟せよ。というのも、あの背後においでの御方が私を御意のままにするように、私も汝を同様に扱うからだ。[12]

「背後においでの御方」とは述べるまでもなく精霊の王のことである。そしてまた人間界、生命界と精霊界とを自由に飛翔しつつ原父の委託を皇帝に伝えるのが「赤い鷹」の使命である。

鷹匠はそれを捕らえようとする前に、まず過去の打擲の謝罪、つまり「汝の高貴な慣わし」に違反したことに対する許しを乞う。鷹が姫の眼を翼で打ったのは傷つけるためではなく、人間界の有象無象から姫の視線を逸らせるためであったと事後に悟ったからである。鷹は歓呼と嘲笑の混じった啼き声をあげ、落ちる滝の水に包み隠されている生命界への入り口に消える。

6．1　皇帝は生命界の入り口に引き寄せられるが如く近づく。皇帝の視線は「睡魔を感じている鷹のように」前方に向けられていた。そしていつしか生命界への門を背後にしていた。鷹は皇帝を誘導したのである。

6．2　皇帝の胸には妃からの書状（紺青宮から俗界に下る前に乳母の助言を得て書いた文だが、ここには影を探す計画については述べられていない）がおさめられている。彼の視覚は眼前の「相互に融けあい、連なりあって、光を放っている」山並みが、書状の文字の妙なる輝きと類似していることを即座に捕える。はや入り口近くで生命界の鼓動が歌声となって聞こえ、万象が刻々と皇帝の魂のなかに染み込んでくる。ここは愛する姫との初めての冒険のあったまさにその場所なのであった。

6．2．1　かくて皇帝は象徴的現実のなかに一度も場所を占めることのなかった生命界の内部に立ち入るのである。ここは未生のものたちにだけでなく、人間界にあって聖俗を問わず彷徨する声（影）がそれが帰属すべき主体を探し求める不確定なインタースペース、いわば象徴的現実の失われた輪の一部である。

6．2．2　生命界の入り口の扉の蝶番が開いて、皇帝は歌声の一言一句を聞き分けたが、その意味をただちには理解できない。

これが何の役にたつのか
われらは未生のものなのに[13)]

四方を壁に囲まれた広間には食卓がしつらえられ、美しい少年が一人立ち働いているのだが、彼は恭しくも皇帝に十二の燭台の輝くテーブルの上座の席を指し示す。歌声はこの軽やかな若い鹿のように歩む少年のものであろうと皇帝は推測する。背後で急に「時ここに至れり」との声が発せられる。他に三人が現れ、そのうちの一人の乙女は少年たちの挙措の未熟さ、すなわち皇帝の幾度もの問いかけ、「汝等の父は誰か」に対して少年たちの示した反応が密かな笑いであったことを謝罪しつつ、答えを回避する。皇帝は彼女の織りあげた毛氈の図柄に見入り、同時に腰に立ち上る冷気を感じる。織物には部分が全体に溶け込んだ壮麗な蔓草、花々、

動物が描かれ、上空には「鷹」が舞っている。乙女は嘆賞する皇帝に織り上げるときの心理を手短かに述べる。それは、「愚かしさと破滅の淵に引き込むもの」を「美」から隔て、「常に在るもの」だけを見て、と。彼の心にはこの乙女と永劫に結ばれたいとの願いがこみ上げる。しかし、そこには「なんら欲望は含まれていなかった」。馬上から騎士二人が敬礼する。少年たちと顔立ちのよく似たこの若い騎士たちは、突然乙女の毛氈の絵から立ち昇ってきたかのように現われ、皇帝の目を一瞬楽しませたのである。給仕に忙しく往来する少年たちが、「みななにものであったのか、なにものでなかったのか」彼には理解できなかった。皇帝は自らに「この場所がどこなのか、自分が誰なのか」と問いかける。生命界では彼の皇帝としての自我が繋留されるべき「固有」の身体が「他者」に委ねられる。

6．3　皇帝は恐れていたものの接近を少しずつ感じ始める。すなわち、これまでの彼の主体的整合性を支えてきた「非知」は瓦解しかけているのである。少年たちや乙女が彼らの氏素性を執拗に尋ねる皇帝に対して、その質問の意味を逸らしたり冷笑の混じった恭順的態度で答えたのはその理由からである。実は彼の「知」なるものは、象徴的宇宙に統合されず、また禁止されてもいる無意識的真実についての「非知」によって存在し得た「知」なのであった。迫り来る硬直の鈍い予感のなかで、彼は重い瞼を開いて自らの陰鬱な確信を漏らす。

> 汝等はある秘密を知っているのだな。汝等のおかげで私が秘密に与ることにでもなれば、私の命は永遠の憩いにつくかもしれぬ[14]

6．3．1　乙女の答えは、真実を明かせば皇帝様は自分たちを「即座に、永劫にご自身の傍から追い払ってしまうことでしょう」というものである。皇帝は、しかしまもなく彼にとって「これまでのどんな出来事よりももっと意味のわからぬ出来事」が起こっているのに気づく。給仕する子供たちが「そこに存在しない客人に、きわめて厳粛に」仕えているのであった。彼らは深い嘆息とともにとめどない涙を流し、なかば抑制された泣き声があたりに響き渡った。ここにはいったい誰がいたのか。その鍵は、終始食卓を仕切り、「時ここに至れり」の声を発していた主膳の頭、あの乙女も服従していたこの人物が与えてくれる。皇帝の眼は彼の視線に辛うじて耐える。というのも、この視線は皇帝に打擲されて血を流し、翼を痙攣させながら飛び去ったあの「鷹」が彼に送った「いつまでもさし貫くような」最後の視線であったからである。皇帝は憤り、全身の力をこめて、この不遜な視線を払い除けようとする。乙女はこの「鷹」が彼女の一番上の弟である主膳の頭その人であると教える。彼が皇帝の耳元にささやく言葉は、侵犯を厳しく禁じられた世界の真実に近づきすぎた彼への警告である。冷気を含んだ声が発せられる。

皇帝様の心がお望みのものを手に入れるのを幇助する者の報酬はわざわいでございます[15)]

6．3．2　皇帝はそこの子供たちから妃の消息を教えられ驚いたばかりでない。彼らは彼が胸にもっている彼女からの書状に書かれている文字を判読でないこと、したがって彼女の心の結び目を解きほぐすに至らないことを非難するのである。文字の審級は、シニフィアンの鎖の秩序に還元できない前言説的次元であって、ここでは「生命界」と「精霊界」においてのみ解読し得るサントームであることが示される。

皇帝はすでに彼らによって見つめられていたのである。彼らが見つめている点からは、彼は妃の彼に対する愛を見ることができない。彼らの視線は魔霊のエフリートの眼の奥の深淵に通じている。あのとき、妃がこの深淵を覗いてしまった女房の恐怖を我が身に引き受けたことからもそれは明らかである。

声は「母」を求めて広間に響いていた。この幻の声は特定の誰かにその発生源をもつのではなく、主体に支持されずに遍在しているのである。そのゆっくりと波打っている、無形の存在は、質量をもった光線の如く広間に充満していた。

6．4　皇帝の身体は例の乙女の眼前で石と化す。彼女を悄然とうち眺めているばかりで動くことも話すこともできなくなった皇帝の眼に、彼女はかつての妃と酷似した不安におののく羚羊の姿と映る。彼女は何を訴えかけているのか。皇帝はこの期に及んでも、彼女の眼から読み取った「あのことの、それが語られるのを聴こうと欲しなかったあのこと」の告白、ある赦しの請求に対して寛大になることはなかった。帝の立像はただ一つ広間にとり残された。

7．0　乳母が染め物屋バラクに魔法の秘薬を飲ませ、女房を篭絡して万事用意の整った川べりの儀式に向かったとき、暗闇をついて精霊が現われ、せっかく女房の身体から離れた「影」が掠め取られてしまう。女房はその直前、「不思議な、それでいて無垢な美しさ」を帯びて、バラクの野獣のように荒々しく、しかし同時に子供のように無力な抱擁を受け入れる。彼女の眼の奥からは「受け入れたり、与えたりすることのできる幾つもの浄福が焔の鎖となって」溢れてきたのである。そして、傍らには昏倒し、身動き一つしない妃があった。「影」はなかった。乳母は虚ろな妃の戦慄した眼の奥に、彼女に対する恐ろしい譴責の色を見て取った。かくて、二人は生命界を包む精霊界の入り口近くに飛び去った。

7．1　精霊の一人、七ヶ月目に姫に「影」が宿ったかどうかを調べるために紺青宮に降り立った男が、漁師の姿で二人に出会う。妃は彼によって乳母と偶然のように別離させられる。乳母が漁師の家のなかを覗くと、そこには「影」のない若い女と彼の妻がいた。乳母は即座にその女があの染め物屋の女房であることに気づき驚く。妃は彷徨ののち、まもなく、父王カイコ

バートが彼女に「転身」の秘法を授けたとある岩山の傍に辿り着く。しかし、彼女の脳裏は人間界の記憶に未だ満たされているせいか、父王の姿を鮮明には思い出せない。伝授の後、その場ですぐに鳥に「転身」したことは憶えていた。身体のなかに囚われ人のように閉じこめられていること、「転身」の能力がいつから失われたのかにも思いを馳せた。妃はこれを父王から下された罰であると感じる。しかし、この近寄り難さのなかに彼女は父を深く感じていたのである。

しかしこういうやり方で妃を罰した父王は、今こそ前にもまして彼女に近かったのである。[16]

8.0　すでに地上での「影」を断念することによって、バラクとその女房の愛を復活させた妃には、今度はこの生命界において、彼らの合一がもたらした彼らの未生の子供による感謝に満ちた出迎えが待っていた。彼らは「時」の充溢のはかない命を妃への恩返しに費やすのである。色とりどりの光彩を放つ「時」の衣装に身体を包み、一瞬輝いて見せる彼らは、石と化した皇帝の横たわる円形の空間へと妃を誘い、死の灰色の影を顔に浮かべつつ霧のように消え去る。彼女が立像に凭れかかり、自分の心臓も石と化すように感じられたとき、足元を「黄金の水」が戯れつつ流れる。「転身」の無限の能力をもつこの水がまもなく渇れたかに思われたとき、彼女は「何か生きもの」のように上から照りおろしてくる燈のもとに佇む。立像は己れの「影」に眼をとめ、次に妃の「影」を探す。一条の光に乗って「影」が一つ彼女に接近し足下にひれ伏す。上に伸びてくるその手には「黄金の水」で満たされた丸い盃があった。夢幻の時間が過ぎ、妃は立像が起き上がり彼女を見たと信ずる。この液状の「霊妙な焔」がそれを可能にしたと思う。しかし、彼女が衣の下の護符を手で触れたとき、例の呪咀が異様に、まるで睡魔のなかにある人の胸からのように響く。一瞥すれば立像は彼方に横たわり、足元に一人の女の影があるのみ。妃にできることはすぐに盃を飲みほし、「影」を手に入れることであった。しかし、彼女はすでに乳母に厳しく宣言していた決意、すなわちバラクとその女房への償いの言葉を忘れてはいなかったのである。それは彼女の心の内奥から自ずから発せられた。「黄金の水」は足下の女に注がれた。すると、水は焔となって空中に舞い上がったのである。

8.1　「黄金の水」は空間に溢れ、二人を浮上させ、立像は妃に抱かれて彼女から生命を受け取った。まもなく訪れた奇跡は次のように語られる。

名状しがたい恍惚感が彼女を貫いた。叫びのような声が彼女の唇に押し寄せてきた。なぜなら、一つの黒い影が妃から出て横たわる皇帝の上を過ぎ、そしてさらに森の地表へと流れていったからである。[17]

二人はお互いに無言の抱擁をする。二人の「影」は一つに溶け合った。そしてその後まもなく、青い一条の光と化した精霊の使者の足もとから一つの「影」が飛び出して、あの染め物屋の女房へと帰っていった。このとき上空には「赤い鷹」が旋回していた。

9.0 『影のない女』において見逃せない一点を最後に述べなければならない。それはこの作品を貫く象徴的法の審級としての「父」の存在と並ぶ超自我としての「母」の存在である。未生のものたちの恐怖、そしてまた染め物屋の女房の「母」に対する執拗な叫びは何を意味するのであろうか。「母」の存在は、「幻の声　voix acousmatique」を主観化せぬまま専ら「父―の―名」の支配を混乱させ、場合によっては阻止する審級として機能していると思われる。「影」の生成される生命界は「母」の領域である。そこは質量をもった光が何物かを生み出しては消滅させることを永劫に反復している。そして「影」は決していわゆる「法」の領域に属するのではなく、「母」の試練を経なければ獲得できないものであるだろう。皇帝に下された裁きがこのことを物語っていると思われる。

AUS DEM ORIGINALTEXT (Alle Zitate im Aufsatz nach der Ausgabe Hugo von Hofmannsthal: *Gesammelte Werke in zehn Einzelbänden*, hg. v. B. Schoeller in Beratung mitR. Hirsch. Frankfurt a.M. 1980, mit folgenden Siglen: D V = *Dramen V. Operndichtungen*; E = *Erzählungen, Erfundene Gespräche und Briefe, Reisen*):

1) Verwandlung ist Leben des Lebens, ist das eigentliche Mysterium der schöpfenden Natur; Beharren ist Erstarren und Tod. Wer leben will, der muß über sich selber hinwegkommen, muß sich verwandeln: er muß vergessen. Und dennoch ist ans Beharren, ans Nichtvergessen, an die Treue alle menschliche Würde geknupft. Dies ist einer von den Abgrundtiefen Widersprüchen, über denen das Leben aufgebaut ist, wie der delphische Tempel über seinem bodenlosen Erdspalt. (V 297)
2) (...): so wie ich einmal in einem Vergrößerungsglas ein Stück von der Haut meines kleinen Fingers gesehen hatte, das einem Blachfeld mit Furchen und Höhlen glich, so ging es mir nun mit den Menschen und ihren Handlungen. Es gelang mir nicht mehr, sie mit dem vereinfachenden Blick der Gewohnheit zu erfassen. Es zerfiel mir alles in Teile, die Teile wieder in Teile, und nichts mehr ließ sich mit einem Begriff umspannen. Die einzelnen Worte schwammen um mich; sie gerannen zu Augen, die mich anstarrten und in die ich wieder hineinstarren muß: Wirbel sind sie, in die hinabzusehen mich schwindelt, die sich unaufhaltsam drehen und durch die hindurch man ins Leere kommt. (E 466)

3) Durch das Dasein hin ist Liebe verbreitet; ergreift sie mit ihrer ganzen Kraft ein Wesen, so löst dieses sich aus seiner Starrnis bis in den tiefsten Grund: die Welt ist ihm wiedergegeben, ja, es zaubert sich selber die Welt hervor als ein Diesseits und Jenseits zugleich. (V 298)

4) Fluch und Tod dem Sterblichen, der diesen Gürtel löst, zu Stein wird die Hand, die es tat, wofern sie nicht der Erde mit dem Schatten ihr Geschick abkauft, zu Stein der Leib, an den die Hand gehört, zu Stein das Auge, das dem Leib dabei geleuchtet — innen der Sinn bleibt lebendig, den ewigen Tod zu schmecken mit der Zunge des Lebens — die Frist ist gesetzt nach Gezeiten der Sterne. (E 348)

5) "Er hat mir zugeschworen, daß ein sterblicher Mensch, wie er, ein Glück von solcher jähen Stärke nicht öfter als einmal im Leben ertragen könnte." (E 346)

6) Mutter, Mutter, laß uns nach Haus Die Tür ist verriegelt: wir finden nicht hinein. (E 360)

Wir sind im Dunkel und in der Furcht Mutter laß uns doch hinein Oder ruf den lieben Vater Daß er uns die Tür auftu! (E 360)

7) Weichet von mir, ihr Verfluchten, und wohnet bei meinem Schatten. (E 361)

8) "Du bist es, die Seltene, Auserlesene unter Tausenden, von der ich weiß, was zu wissen mir das alte Herz im Leibe erwärmt. Du bist es, die über ihren eigenen Schatten springt ..." (E 357)

9) "Die Augen, heiße ihn die Augen wegtun", rief die Frau. (E 370)

10) "Ein krummer Nagel", antwortet die flinke Zunge der Alten, "ist noch keine Angel, es muß erst ein Widerhaken daran." (E 370)

11) (...) der Efrit wandte ihr sein Gesicht zu, das loderte wie ein offenes Feuer; durch seine zwei ungleichen Augen grinsten die Abgründe des nie zu Betretenden herein, ein Grausen faßte sie, nicht für sich selber, sondern in der Seele der Färberin, daß diese in den Armen eines solchen Dämons liegen und ihren Atem mit dem seinen vermischen sollte. (E 371)

Ein ungeheures Gefühl durchfuhr die Kaiserin vom Wirbel bis zur Sohle. Sie wußte kaum mehr, wer sie war, nicht, wie sie hierhergekommen war. (E 371)

12) "Vorwärts du", sagte er,"deine Angst sieht schärfer als das schärfste Auge, melde mir du den, auf den ich warte, und melde ihn bald oder es soll dein Tod sein. Denn so wie er da hinten über mir ist, so bin ich über dir." (E 378)

13) Was fruchtet dies, wir werden nicht geboren! (E 381)

14) "Ihr wisset um ein Geheimnis, und es könnte mich selig machen, wenn ihr mich daran

teilnehmen ließet." (E 390)

15) "Schlecht ist der Lohn dessen, der dir hilft zu gewinnen, was dein Herz begehrt!" (E 394)

16) (...) und er, der sie so gestraft hatte, war ihr näher als je. (E 425)

17) Ein unaussprechliches Entzücken durchfuhr sie aber nun und ein Schrei drang über ihre Lippen: denn ein schwarzer Schatten floß von ihr über den Liegenden, über den Waldboden hin. (E 435)